

福

島根相馬郡新地町には、古くから「えのめえ」という言葉がある。家の前という意味だ。隣近所や地域の人たちが家の前で交流し、コミュニティの絆を深めてきた風習を象徴している。「えのめえ」をインターネットで検索しても、めぼしい記事は出てこない。この言葉を拾い上げたのは、新地町の復興公営住宅の設計に際し、地域のことを調べ上げたURのチームだった。彼らは埋もれていたこの言葉を新地町の関係者に投げかけた。60代後半の加藤憲郎町長は「久しぶりに聞いたよ」と懐かしそうに笑い、役場の若い職員は「初めて聞く言葉」と対照的な反応を見せた。新地に伝わる「えのめえ」は、町民の記憶から薄れつつあったようだ。

◆「家族」に安心を与える放送

新地町が標榜するのは「住みやすいまち」だ。それは自然災害が少なかったことも無縁ではない。「大きな津波の被害はなく、台風

ら3日後の3月14日から3ヵ月あまりの間、毎朝7時から防災行政無線で自ら語りかけた。

「正しい情報を町民に。これが第一の目的です。町民に安心していただくため放射線量を公表し、どのような支援物資が届くか、全国から寄せられる支援者の方々の声などもできるかぎり届けました」のちに町民に聞くと、毎朝町長の声を聞くと「ああ、今日もここ

玄関前の広い廊下にはベンチが置かれている。



まちづくりに終わりはない

福島・新地町愛宕東地区復興公営住宅 (2013年◆平成25年建設)



新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

の直撃も少ないまちでした。国の津波シミュレーションでも、海岸から500メートル以上離れた常磐線は越えないと言われていました。でも、3月11日に新地を襲った津波の高さは15メートルを越え、ホームと跨線橋の一部を残して常磐線をめぐり上げたのです」

者は116人を数えることになった。一方、家を流されながらも難を逃れた町民は、とりあえずは思い思いに避難所に駆け込んだ。ところが、次の日には避難所から避難所への大移動が始まる。

「新地に入ると、防災無線が避難を呼びかけていました。初期対応は合格とホッとしました」

「コミュニティごとに集まりたいという町民の自発的行動です。内陸で被害が少ない地区の人が交替で炊き出しを行い、毛布やストローを差し入れました。一切、町が指示したことはありません」

安堵も東の間、誰かが叫ぶ声に慌てて屋上に上がる。町長の目に飛び込んできたのは、ドス黒い波の壁が迫ってくる光景だった。

そう町長は言う。新地から「えのめえ」という言葉そのものは忘れられつつあっても、絆やつながりを大切にしているDNAは、町民に受け継がれていたのだから。

「あつという間でした。家や車が次々と流されていく様子を、ただ呆然と見ているしかありませんでした。すべての町民が無事に避難してきてくれればいい。頭に浮かんだのはそんな思いでした」

町長も、日頃から町民は家族だと口にする。家長として大切な家族の不安を和らげようと、震災か

で生活していいんだ」という安堵の気持ちになったという。

◆「えのめえ」を演出する住宅

震災直後の混乱が過ぎると、住宅再建が喫緊の課題となった。ただ、決して拙速になつてはならないと、町長は職員に指示する。

「こんど移るところは、町民にとっては終の住み家です。少し時間がかかってもいいから、町民が希望するところに希望する広さを確保しようと考えたのです」

町民の希望は「コミュニティごとの移転」に集約された。家を建て直す人と建て直さない人を同じ地区に移転させるには、防災集団移転と復興公営住宅建設をセットで進める必要がある。

「でも、町の所有地はなく、まとまった広さの土地が簡単に用意できるわけでもありません。集合住宅の建設は自然な流れでした」

新地町都市計画課の担当者はそう語る。ただ、いち早く地権者の合意を得た愛宕東地区は宅地とし

ては難しい北向きの斜面だった。

「そんな土地で町民と町の希望を実現できるのは、URさんしかない」と判断しました。それに、新地には学校や役場など、数えるほどしか鉄筋コンクリートの建物がありません。地元業者にノウハウはなく、その点でもURさんが適任という判断になったのです」

期待に応えようと、URは愛宕東に数々の配慮を施した。一つは駐車場である。公共交通機関が脆弱な地方では、大人の数だけ車が必要になる。愛宕東では、住居数の2倍の駐車場を用意した。

さらに、各住居には仏壇も置けるスペースが備えつけられた。これについて担当者はこう語る。

「新地にも、震災で家族を亡くされた方がいらっしやいます。そういう配慮が嬉しかったですね」

URは、建物の共用部分の充実にも心を砕いた。新地特有の「えのめえ」を演出するため、建物と建物の間に公園を配置し、住人の交流スペースとした。玄関先の廊

下を広くし、そこにベンチを置くなど隣近所の住民との絆やつながりを深める空間に仕上げた。

傾斜地を逆手に取り、麓から住宅までの坂道の両側に桜の木を植えた。新地の町花は桜、まちの象徴鹿嶋山は桜の名所として知られる。愛宕東住宅も、新たな花見の名所として賑わうかもしれない。

もちろん、震災は不幸な出来事だ。しかし、担当者は「震災を機に、新地のコミュニティが強固になりました」と話している。町長も、力強い口調でこう語る。

「まちづくりは未来永劫続くものなので、震災を新しいまちの創造につなげる必要があります。新地の良さを次世代に感じ取ってもらえる土台をつくりたいですね」

新地に伝わる「えのめえ」の精神を生かした復興への挑戦は、これからも続いていくだろう。



街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作]新潮社